チャペルの窓

「地球の裏からの暑中見舞い」　　黒田　朔

「連日体温以上の暑さとはお気の毒」との暑中見舞いが届いた。地球の裏、ブラジルのＴさんからである。そりゃあその筈、今、ブラジルは冬。ブラジルを何度か訪ねたが、もう30年も前のことである。サンパウロ、リオホリゾンテ、ブラジリアなどをアシュラム集会での奉仕をし、お世話になった宣教師河島民江先生をアマゾンのマナウスまでも訪ねたが、飛行機で飛びながら変わらない景色にブラジルの広さ、大きさを目で見て、驚いたことを思い出す。

戦前、戦後に移民船がハワイ、ブラジルへと移民を運んだが、移民たちはハワイでは人種差別と闘い、ブラジルでは自然の厳しさと闘い、その苦闘の中で「今」を築いた。訪ねた日系移民の家はどこも立派な邸宅で驚いたが、家族が「日本への出稼ぎ」にいった仕送りによると聞き、今では考えられないが、当時の「円」の強さに驚いた。

そんな中から、Ｔさんのお見舞いメールである。Ｐさんは移民船の中で出会いを通してクリスチャンとなり、厳しい移民生活の中でプロポリスの開発に成功、今は、日本では考えられない広い敷地で自給生活をしておられ、すき焼きでのもてなしは、野菜は勿論、肝心の肉まで、すべてが自家製。卵は鶏の後を追いかけ庭で見つけるなど、ブラジル的だと話し合った。

アシュラムを通して友達となったＰさんは、昨年、「これが最後の祖国訪問」とアシュラムの友を訪問を済ませた。住む場所、その働きなどすべてが違ってはいても、信仰による望みは同じ。「お気の毒」とのお見舞いメールを読み返しながら、夏休みに訪ねた時に見て驚いた、真っ赤なポインセチアを思い出しながら、歳を重ねて、尚、うれしいお見舞いメールのやり取りができる良き友を下さった主に感謝を捧げる。

「遠い国からの良い消息は、疲れたたましいへの冷たい水。」（箴言25：25）